

(論文内容の要旨)

本論は17世紀ドイツの哲学者ライプニッツの連続性をめぐる思想を、包括的なしかたで解釈することを目標にした論文である。本論はまず、17世紀の哲学において問題化していた「想像力」の主題にかんするライプニッツの独自の取り組みを論じる。とりわけ、数学における想像力の役割はどのように説明されるのか、また数学的対象はどのように位置づけられるのかを分析する。次に、想像概念への注目を通じて、ライプニッツの普遍数学思想と連続体の迷宮をめぐる議論のあいだの連関性、いいかえれば数学と哲学の間の結びつきを考察する。本論は、これまで中心的に論じられてこなかった「ライプニッツの想像の理論」の観点から、ライプニッツの数理哲学の体系を考察する試みである。彼の哲学が連続性や連続体を焦点にしたものであることは、彼の哲学にかんする従来の研究でも常に意識されてきたことであるが、本論は、この哲学には「連続体の迷宮」よりも深い「想像の迷宮」が横たわっている、ということを明らかにしようとするのである。

論文全体は大きく三つの章に分かれている。

第1章では、デカルトの普遍数学思想の起源である『規則論』を取り上げる。デカルトはその初期の作品『精神指導の規則』では、想像力が数学的実践において持つ役割を積極的に評価していた。本章は近代解析幾何学の萌芽期にあって、デカルトが伝統的哲学の課題である想像と抽象の問題をどのように扱おうとしたのかを論じる。そこには観念と像の対立、あるいは概念と形象の対立をめぐる、「想像の問題」という課題がある。『規則論』でデカルトは、想像する知性という能力に投錨することで、その問題を避けようとした。しかし、そうすることにおいて彼は、想像のシンボリック働きに注目し、図形を必要最小限なものに限定することで、求める数学的関係を抽象する道を開いた。また、デカルトは数学的対象の存在を説明するために、彼独自の抽象説を展開した。とはいえデカルトは、やがて想像力を形而上学的認識から追放し、普遍数学の思想をこれ以上追求することもなかった。こうし

てデカルトの提起した課題は、普遍数学の思想とともに、ライプニッツに受け継がれることになった。

第2章では、ライプニッツにおける数学と哲学の間の関係を、彼の想像の理論に焦点を当てて検討する。ライプニッツは普遍数学を純粹知性の学とするデカルトに対して、これを「想像の論理学」と規定する。この想像の一般的学問としての普遍数学という課題は、ライプニッツの普遍数学にかんするこれまでの諸解釈では、論理学としての普遍数学を強調してきたために、ほとんど軽視されてきたテーマである。

ライプニッツの普遍数学はデカルトの普遍数学思想の延長にありつつも、それをはるかにしのぐ内容を持つものである。デカルトが幾何学的図形として「線」を残したのに対し、ライプニッツは一切の図形に依存しない「幾何学的記号法」を構想する。その構想には徹底したシンボリズムにもとづく記号の哲学が伺える。そしてその記号法の背景には、想像の概念とそのはたらきに関するライプニッツの深い哲学的反省がある。「幾何学的記号法」の延長にある「位置解析」は、「想像力を補完し完成する学」とまで言われる。たしかにライプニッツもまた、デカルト派や当時の知識人とともに、想像力が誤謬の源泉であるとは考えた。しかし、それは経験的で混雑とした思惟としての想像においてのみである。ライプニッツは人間の認識の本性を「盲目的思考」ないし「記号的思惟」に認める。そしてそこに想像の極めて有用なはたらきを見出す。ライプニッツは、想像をそれが持ちうる明晰判明で十全な認識である、記号的認識へと徹底する。このようなライプニッツの想像力の積極的評価には、「想像もまた秩序づけられうる」とする、ライプニッツに独自の「調和」の哲学がある。それによれば、観念の諸関係と、事物の諸関係のあいだには、表現に関する構造的な秩序的対応があり、その対応は実在的で真なるものである。こうして、ライプニッツの想像の理論は、記号の理論および表現の形而上学と不可分な仕方で結びつくのである。

第3章では、ライプニッツの連続体の迷宮の問題に関する具体的な取り組みを扱う。彼の哲学においてはすでに前期の段階で、現実的なものと理念的なものとの区

別にもとづく連続体の迷宮の解決が示唆されていた。そして連続体概念の精神的基礎として、想像力が認められていた。ライプニッツの無限小概念に関しても、それは固定した対象としてではなく、むしろある規則との関連において捉えられていた。その規則は、われわれの想像力と精神に基礎づけられたものであり、その限りで、無限小は虚構という身分にもかかわらず、ある実在性を持つとされる。その実在性の基盤を、われわれは「自然の光」として持つのであり、また究極的には神の精神において持つとライプニッツは考える。

ライプニッツは、想像をそうしたより完全で叡知的な対象へと向かわせるために、秩序づけるところのある原理が必要と考える。その原理が「連続律」であり、より一般的には「秩序の原理」である。それは、神の完全性に由来する自然の秩序と、予定調和に関するライプニッツの形而上学から帰結する、ある形而上学的原理であると同時に、想像に関する哲学的反省からわれわれに要請された、想像に秩序をもたらしのための、ある建築術的原理でもある。もちろんライプニッツは「想像力の限界」について十分理解していた。それは力の原理や、欲求や表象の原理など、形而上学に固有の領域の把握のためにはおよそ役に立たないものである。しかし、他方で、「想像力の超克」もまた、学的理念として主張される。なぜなら、現象においてすら、想像力の到達しえない観念が多く残されているからである。ライプニッツは、そうした例として、しばしば、自らが発見した動力学におけるエネルギー保存則を挙げる。連続律は、われわれの想像力によっては明白ではなく、したがって想像力が誤りやすいような、そうした規則の発見に役立つものである。こうして、連続律は、われわれの想像を超克して、現象の基礎をなしている真実在の世界を探求するための、アリアドネーの糸となる。すなわち、連続律は、具体と抽象あるいは像と観念のあいだを架ける橋となるのである。

以上三章からなる全体の議論を通じ、本論では、ライプニッツの数理哲学を「連続性の哲学」と特徴づける。その理由は第一に、ライプニッツは「連続律」を原理とする、算術と幾何学の真の統一を構想するからである。例えば、点の軌跡としての連続の考えや、連続の切断ないし極限としての点の考えを含む幾何学的記号法、

および無限小の連続体を含む無限小計算は、連続性の本性に関する徹底した考察に基づく。また第二に、一般的秩序の原理および理由律に基づく、数学と自然学の「調和」の考えがある。例えば、幾何学的対象（観念）と幾何学的像ないし図形（現象）の間の、記号を介した秩序的な対応の考えは、連続体の迷宮をめぐるライプニッツの研究と不可分である。さらに、伝統的な枠組みを拡張したライプニッツの定義論あるいは認識に関する一般的原理論における観念の分類は、判明性の程度に関するライプニッツ独自の表象の理論において、連続性の相のもとで捉えられる。予定調和を原理とする精神と想像力の調和の考えもまた、その例外ではない。ライプニッツの立場は、こうした観念の内在／超越の問題を越えたところにある。普遍数学および普遍的記号法は、想像のシンボリック機能に特化することを可能にし、連続性の原理は抽象と想像を同属的な連続的なものとして捉えること可能にする。そこには確固たる「連続性の哲学」がある、というのが本論の結論である。

(論文審査の結果の要旨)

本論は17世紀ドイツの哲学者ライプニッツの連続性をめぐる思想を、その膨大なテキスト群を渉猟することによって浮き彫りにしようとした論文である。よく知られているようにライプニッツは、哲学においてもっとも扱いがたい二つの主題として、「自由をめぐる迷宮」と「連続体をめぐる迷宮」というテーマがあると述べたが、本論はそのうち後者の問題にかんする考察を行ったものである。連続体の迷宮とは幾何学における点と線の関係のように、無数の非連続な存在が「合成」されることからいかにして連続体が生成するのか、という問題である。一般にライプニッツはこの問題を、「連続律」という形而上学的原理の確立と、それに基づくモノアドを基体とする存在論によって解決しようとしたと解釈されるのが普通であるが、本論ではこのテーマに先行するライプニッツの問題意識として、幾何学を含む数学一般を体系化しようとした「普遍数学(Mathesis Universalis)」の成立に関与する「想像力」の役割の謎という問題があり、この想像力の働きと純粹に知性的な分析の役割との総合のために導入されたものこそ、連続律という形而上学的原理であった、という解釈を示す。いいかえれば、ライプニッツの連続体の迷宮への取り組みは、人間精神における「記号的想像力の迷宮」という問題の一部として追求された、というのが本論の主張しようとするところである。

ライプニッツの哲学を記号論的認識論によって特徴づけようとする解釈はこれまでも多く見られたが、その認識論の核に想像力をめぐる問題があり、この能力の正当化のために数学的対象や物体のもつ連続性をめぐる分析や、連続律の導入があった、という本論の議論は非常に独創的なものであり、哲学史的に見て斬新かつ重要な指摘である。筆者はこの主張を論証するために、きわめて多くのテキストと非常に広範囲なライプニッツ研究の成果を咀嚼、活用している。そして、その議論の立論の過程において以下のようないくつかの重要な洞察を提示している。

(1) ライプニッツの普遍数学の構想が、デカルトの『精神指導の規則』に見られ

る普遍数学の構想を引き継いだものであることは、哲学史のいわば常識である。しかしながら、筆者によれば、デカルトの当初の普遍数学においては、「想像力に助けられた知性」と「純粹知性」の併用が強調されていたにもかかわらず、この観点は後のデカルトによって放棄され、むしろライプニッツによって引き受けられた重要な課題となったとされる。いいかえれば、デカルトによって発見された「形象的思惟としての知性的想像力」という認識能力に着目し、その全面的な展開を企てたのがライプニッツだということである。この指摘は二人の哲学者の思想上の関係を再考する上で重要である。

(2) ライプニッツの普遍数学がいわゆるルルス流の「結合術」を下敷きにした記号論的かつ形式論理的な企てであることは論をまたない。しかしながらこの構想が「想像力の論理学」と呼ばれ、「量と質」の双方を含む「想像可能な対象一般」を扱う学問であることには、これまで十分な光が当てられてこなかった。ライプニッツの多くの書簡の分析を基にした筆者の解釈では、現代のトポロジーにも通じる「位置解析」の構想や、幾何学の記号計算への還元法の考案など、彼のさまざまな数学上の独創的なアイデアも、この想像力の論理学という構想の下で統一的に理解されなければならないという。

(3) ライプニッツはデカルトが萌芽的に示した想像力に助けられた知性という思想を発展させた一方で、デカルトの物体即空間即延長の存在論にかんしては強く反対する立場を採った。物体を延長と見る思想にたいする反対は特に後期のテキストで展開されたが、その批判の核心には純粹に知性的で抽象的な延長と、実体的な性質と現象としての性質を併せ持つ物体との結びつきを、どう確保するのかという難問が控えていた。筆者によれば、ライプニッツはこの難問の解決のためにこそ、知覚と知性、現実と理念とを橋渡しする「連続律」の原理を導入したのであるが、この導入を可能にしたのは単なる空想能力としての想像力ではなく、記号によって想像可能なものを把握する記号的想像力に内属する「連結」の能力への着目であった。

本論はこのように、多くの重要な洞察を含む大規模なライプニッツ研究であり、内外の哲学史研究に寄与するものと評価できる貴重な成果である。ライプニッツの

哲学の領域は膨大であり、いうまでもなく本論によって扱われた範囲はその一部にすぎないが、限定された範囲とはいえ筆者が掘り起こした事柄の意義は少なくない。ここであえていくつかの不満点を指摘するならば、(1) ライプニッツの膨大なテキストへの参照において、その取捨選択を決定する明快な基準と解釈上のウェイト付けの方針が十分に示されていない、(2) ライプニッツにおいて重視されている、数学、物理学、形而上学など学問相互の秩序と、これらを支える連続律などのメタ原理によって形成される「建築術的体系」の構造が、筆者の議論のなかで十分に活かされておらず、分析の過程で曖昧なままになっている、などの点が注意される。筆者の今後の研究のさらなる進展によって、これらの点にも目配りがなされることを期待したい。

以上審査したところにより、本論は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年2月23日、審査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄についての口頭試問を行った結果、合格と認めた。